

\*\*\*\*\*

NPO法日本海洋深層水協会メールマガジン 第79号 (2015年2月28日)

\*\*\*\*\*

NPO法人日本海洋深層水協会 メールマガ編集チーム

当協会では、海洋深層水利用の最新動向や、各地のイベント、製品開発などの話題を、会員および一般の皆様へ、より積極的にお知らせするために、メールマガジンを発行しています。

どなたでもご利用いただけますので、配信をご希望の方は、当協会HPの“メールマガジンの申込み”

[http://www.npojadowa.net/DWScript/DWInfo\\_MailMgzn.htm](http://www.npojadowa.net/DWScript/DWInfo_MailMgzn.htm)

からお申し込みください。

なお、昨年10月から非会員の方には3か月に1回の配信となっています。

会員向けには、同時に海洋深層水関連ニュースも配信しています。

読者の皆様で、メルマガやHPを通じて情報や話題を提供したいと思われる方は、メールで [npojadowa@npojadowa.net](mailto:npojadowa@npojadowa.net) まで、ご連絡ください。

\*\*\*\*\*

目次 <会員投稿記事>

見かけなくなったものをレベル分けして遊ぶ

その2 一心の奥底から再びしみ出してきた「憂い」

\*\*\*\*\*

今回のメルマガでは、前回に引き続き、会員から寄せられた投稿記事をお送りします。

見かけなくなったものをレベル分けして遊ぶ

その2 一心の奥底から再びしみ出してきた「憂い」

心の奥底から再びしみ出してきた「憂い」、それはこんなことでした。

ひと昔半前、家族で佐渡旅行した際、保護センターでトキの姿を見ることができました。しかし、その後、2003年、日本のトキは絶滅してしまいました。

アホウドリも、今や「鳥島」などにわずかに残るものが1993年に国内希少野生動植物種に指定され絶滅のおそれのある種として、一縷の望みを持って繁殖保護活動が行われています。オオワシやウミガメ、エゾオコジョ、エゾシマリス、オガサワラオオコウモリその他の動物、そして、キキョウやツリフネソウといった植物まで、私には旅の懐かしい記憶に残す動植物までもがこの地球から姿を消そうとしている事実。

これほど短期間に起こっている絶滅危惧種の増加は、今後の世界に何をもたらすのでしょうか。

明治後期には絶滅したといわれるニホンオオカミは、現代人は見たこともない絶滅種。名前も聞いたことが無いような絶滅生物が、何故滅んだか？とか、人間の生活に関わりがあるのか？などを一般の人たちが考える機会が、このニホンオオカミを例にとってもまず無いと思われます。(たまたま、今日のほ乳類の繁栄につながるインパクトのある滅び方をした恐竜には、多くの人の関心がいくことは別として。)



最後の日本産トキ「キン」のはく製



ニホンオオカミのはく製

姿を見かけなくなったスズメたちも近い将来、滅びてしまうのでしょうか。ある生き物の姿が地上から消えたとき、その後には生まれる私たちの子孫は、その生物の絶滅という出来事に対して、私たち現代人が抱いている、はるか遠い過去に滅んだ恐竜以外の生物種に対する見方とそれほど変わらない感覚で捉えることになりそうだという気がします。つまり、個人にとっては、生まれたときに存在しないかつての絶滅生物というものは、ある意味、始めから地球には存在しない生き物とイコールで、同じ地球にいた生物であるという意識さえも持ち得ないことになるのではないのでしょうか。

今や、生活のシーンには、生き物としてはペットの存在が大きいものの、その他の自然界に暮らす沢山の生き物に対しては触れる機会があまり無く、その数の増減も意識に上ることもありません。そんな無感覚な時代に変貌していくことを私は恐れます。

微量の農薬、微量の放射能、微量の…、それらは生き物に対してどのような影響があるのか。どのような生き物に対してどのような作用が及ぶというのか分からないまま、重宝とされるものを使い続けている今があれば必然的に行くつく世界。

それは、こんな世界であって欲しくない。

「スズメがすごく少なくなってきたね…。」、「ミツバチも、最近姿が見えないけど…。」といった平成の年配者が公園で話していた頃の会話に替わり、次の時代、少なくなりながらも何とか半数程度の個体数に回復してきたスズメたちが、梢で仲間と何かささやき合っている。

ウェアラブル翻訳機が動物たちの会話も翻訳してくれる時代になっていた。何故か人類は急激に人口が減少し、今まで拡大してきた多くの町が少しずつ草木に覆い被され原野に戻っていつている。そのような場所で快適生活を取り戻したスズメ達がささやき合っているのも、私たちの子孫の一人の坊やが、翻訳機をスズメたちに向けたところ「最近、ヒトを見かけなくなったけど…何故？」というように翻訳された。

蒔けば、将来の豊作につながるはずの豆を、今の食卓を豪華にするために使ってしまふ生活に慣れきっている私達。「この生活を、どこかで方向転換する必要がある」と、たまに振り返る余裕の時間が生まれたときに一瞬は頭をよぎるのだが、日常の生活に戻り時間に埋没してしまうと、それを意識することさえも惰性が許してくれない。

本日1月3日、正月の最後の夕食は、たらふく食べた二日半の食事を元に戻すべく、小さめの寿司折りと少量のクロマグロを買って食してしまった。

つい最近、絶滅危惧種にクロマグロが指定されたのを知っていながら…。

この冬休み、仕事に追われる日常から離れて山中の星をゆっくりと眺める機会を得た。そのような時の流れの中で、ふと頭に浮かんだ勝手なルールの下で、正月の三が日の遊びを思い立ち、その結果に目覚めた憂鬱。

しかし、この憂鬱も、明日からの生活でしばらくは消し去られるものとなろう。

(円周率 $\pi$ )